

佳作

おじいちゃんのもも

徳島県 東みよし町立三加茂中学校二年 北原 悠生

僕の家は専業農家だ。リーダーは祖父で、祖母と母が主に、僕も手が足りないときには手伝っている。家にはビニールハウスが五棟あり、お米や野菜を一年中作っている。三月になるとそのうち三棟のハウスにメロンの苗を植える。今年の七月、祖父の作るそのメロンが学校の給食に出たのだ。

メロンの栽培は三月から始まる。メロンの苗は少しづつ日にちをずらして植えるのがコツだそう。祖父は毎日、水や肥料、ハウスの温度を管理している。

四月の中旬になると家族で脇芽をかく作業をする。メロンは一本のつるに最後一つなるようにするそう。

五月の上旬からは少しづつ大きくなってくる。昨年は天候のせいで全体的に小さめだったため、今年

は大きくなったらしいのになあと思いつながら世話をした。

六月になるとメロンの網目が出てくる。ハウスを覗くと、メロンが一行に並んでいてとてもかわいらしい。暑くなってくるとビニールハウスに日よけのネットをかける。日光が当たりすぎるとメロンが傷むからだ。これはなかなかの力仕事で、毎年、祖母や母に代わって僕の役目となっている。

七月になって、メロンの糖度が十五度になると収穫が始まる。収穫が始まってからは僕もみんなも大忙しだ。農協に持っていく箱や、近所の人を買いに來る箱を、重さを計りながら作っていく。メロンの箱に入れる説明書を作るのも僕の役目で、メロンが一番おいしそうに写る写真を選び、おいしい食べ方を紹介する。今年は三百枚作り、進物用のメロンの箱に入れた。

そうして祖父たちが愛情と手間暇かけて作ったメロンは甘く、ジュシーで僕の自慢だ。「毎年楽しみにしている」とお客さんが言ってくれるのが嬉しい。そんな僕の自慢の祖父のメロンが、七月六日、給食に出た。僕はずっとこの日を楽しみにしていて、まだかまだかと献立表をチェックする日が続いている。

た。祖父のおいしいメロンが友だちの口に入るのだ。当日は放送や掲示物で、祖父のメロンが東みよし町の地場産物として紹介されていた。

「三加茂町の北原さんのメロンです」と紹介されたときは顔が熱くなったが、友だちや先輩、先生が、「メロンって北原くんちの？」

「甘かった。」

「おいしかった。」
と言ってくれ、照れくささよりもうれしさや誇らしさがまぎった。食べてくれる人たちのこの言葉のために祖父たちは一生懸命努力しているのだな、と感動した。

農業は暑くても寒くてもハウスで働かなくてはならないつらい仕事だ。「いやだなあ」と思うこともある。しかし、あまったメロンをじゃんけんまでしておいしそうに食べるクラスメイトを見ると、僕はとてもうれしく、農業を続けている祖父を誇らしく思う。メロンのおかげで、家族に感謝し、農業の偉大さを感じることができた。これからも東みよし町の地場産物として、祖父のメロンが地域の人に愛され続けてほしい。